東松山市の概況

- ●東京から　５０ｋｍ
  …埼玉県の中央
  電車で１時間半
  通勤圏の限界
- ●面積　６５ｋｍ^2
  …平成の合併は
  成就せず
- ●人口　９万人弱
  …最近１０年間は
  横ばいから微減

●日本スリーデーマーチ

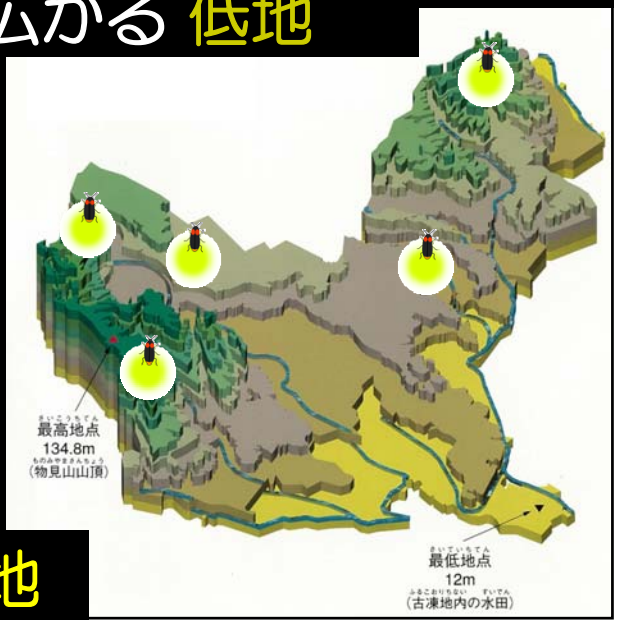
11月初旬の3日間、東松山市を中心として開催される国内最大のウォーキングイベント当市開催も今年で30周年！

秩父山系に連なる丘陵地が関東平野と出会う場所

⇒起伏に富む

市街地や畑の広がる 台地
と田んぼが広がる 低地

その間に
連なる崖線
に沿って
点在する
湧水が
ホタルの
格好の生息地



●きっかけ
⇒ホタルの保護を訴える
女子中学生からの手紙
を読んだ市長が公約に。
⇒当初はホタルの観察公園
的なイメージ

平成１１年度から事業着手
…早10年を経過

公募市民との協働による
●生息確認調査（H11～）
２０か所で確認

●基本計画策定（H12）

●専門家による裏付調査
（H13～14）

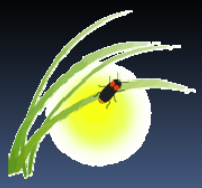
●公募（≒ホタル好き）
市民＋地域の幅広い
関係者による拠点整備
地の選定（H14）

整備を行う生息地を決定
し、ホタル公園の具体化
に着手（H15～）

ところが、具体化には、
様々な問題が！

生息地は
“農地”！
耕作放棄
された田畑
に湧水が
流れ込み、
湿地化。

土地改良も行われて
おらず、農地として
の有効利用は難しい
状況。

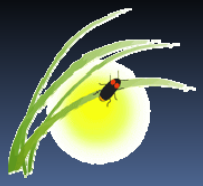


しかしながら、位置づけ上は、あくまで農業振興地域内の“甲種農地”

そのため、都市施設である公園の整備はもとより、市が借り受けることも困難！

加えて、市の財政も
年々厳しくなる中で、
一点豪華的な“ホタル
公園の整備”は、
いっそう困難に。

そこで“ホタル公園”
を白紙に戻し、
コンセプトを根本から
再検討することに！



２つのコンセプト

①施設の整備から、協働のモデルづくりへ！

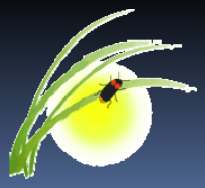
②通年利用の確保。ホタルが光る時だけ賑わう場所にしない！

２つのコンセプト

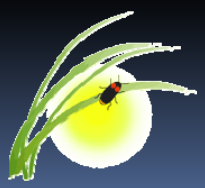
①施設の整備から、協働のモデルづくりへ！

②通年利用の確保。ホタルが光る時だけ賑わう場所にしない！

そもそも“環境の施策”
数ある生息地のうちの
１か所だけに金をかけ、
保全するのは本来の仕事
ではない。

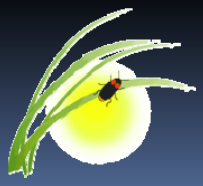


市で設置した公園では、
市民は“お客さん”。
地道に続けなければ
ならない管理作業には、
地域の主体的な
参画が不可欠。

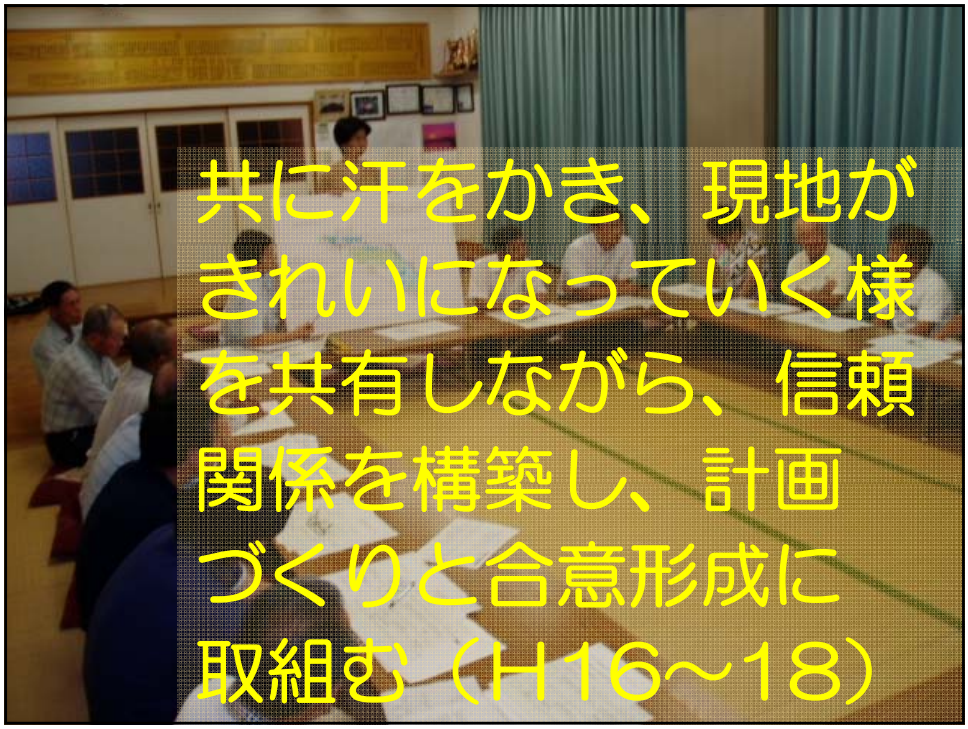


そこで“行政主体の施設整備から、協働による保全活動の“場づくり”に方向転換。他の生息地への汎用性のあるモデルの構築を目指す。

協働のモデルとして、ローコストで汎用性のあるコモンズ（＝共同管理空間）の創出を目指す。

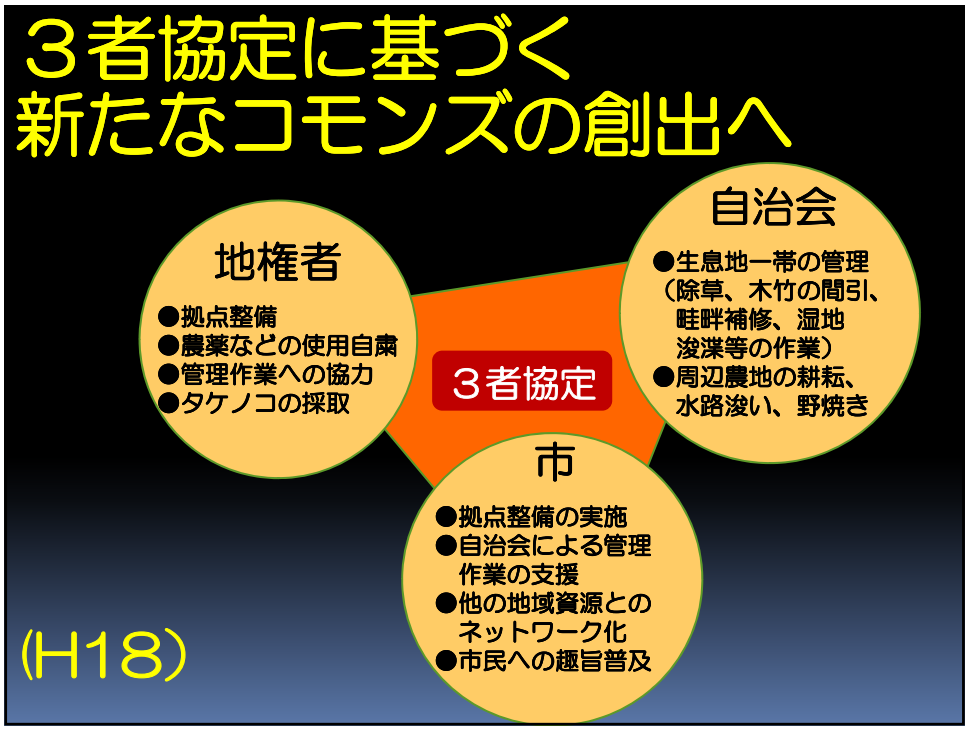


まず、地権者、自治会、市の３者で、長年放置され、荒廃した生息地一帯の整備にとりかかる。


共に汗をかき、現地がきれいになっていく様を共有しながら、信頼関係を構築し、計画づくりと合意形成に取組む（H16～18）

大改造!!
劇的ビフォ→アフター
１年目だけで枯れ竹３トンを撤去

大改造!!
劇的ビフォ→アフター
切り開いた先に
さらにたくさん
のホタルの生息
を確認！


３者協定に基づく
新たなコモンズの創出へ
地権者
●拠点整備
●農薬などの使用自粛
●管理作業への協力
●タケノコの採取
自治会
●生息地一帯の管理
（除草、木竹の間引、
畦畔補修、湿地
浚渫等の作業）
●周辺農地の耕耘、
水路浚い、野焼き
３者協定
市
●拠点整備の実施
●自治会による管理
作業の支援
●他の地域資源との
ネットワーク化
●市民への趣旨普及
(H18)

●地域ぐるみの整備作業
（H16～継続）
⇒竹の間伐、草刈、
湿地の浚渫
●協定に基づく整備工事
（H18～20）

平成１８年度
湿地整備工事
大改造!!
劇的ビフォ→アフター

大改造!!
劇的ビフォ→アフター
平成１９年度
水路・畦畔整備工事

協働のモデルづくりの
４つの成果

①環境意識の広がり

- 除草剤の自粛
- 合併処理浄化槽への切替
- ホタル以外の希少種の保全
- 周辺の農地や水路の管理促進

②コミュニティ活性化

- 当事者意識の高まり
- 自治会内にホタルの推進組織を設置
- 自治会行事全般への参加者数の増加
- “元気老人”による便利屋組織の立上げ

③地域への愛着の深まり

- 畑仕事の帰りや散歩の途中で立寄る人、孫の手を引いて訪れる人が増加。
- まちはずれで不便という感覚が、今も良いものが残っているという認識へ。

④モデルの波及効果

- 自治会長間の学び合いによる他の生息地への展開
  ⇒今春から新たに２か所で
- モデル地区に隣接する他の生息地への自主的展開
  （同一自治会による）

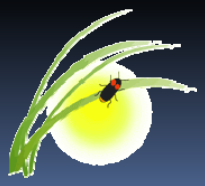
２つのコンセプト

①施設の整備から、協働
　のモデルづくりへ！

②通年利用の確保。
　ホタルが光る時だけ
　賑わう場所にしない！

ホタルだけにとらわれず、
地域の様々な資源との
ネットワーク化を進める。
≒エコミュージアム

生息地の周囲には
様々な“宝物”が！



●原爆の図 丸木美術館

ホタルの里の近くにある平和をテーマとする美術館　⇒世界的な文化遺産であるにも関らず、思想的な問題もあり、

地域とのつながりはこれまで希薄！

●ホタルの里の展覧会

（H17）

ホタル ＋ アニメの原画 ＋ 丸木夫妻の地域にちなんだ作品を集めた展覧会を丸木美術館で開催。

●三橋国民氏との出会い

以前、学習会にお呼びしたホタル研究家の大場信義先生から、「若くして散った戦友の鎮魂のため、ホタルにまつわる自身の鮮烈な戦争体験を描いている芸術家」の存在を知る。

展覧会での借用をお願いしたところ話が急展開し、大作３枚を新たに描き起こし、それらが市に寄贈されることになった！

●ホタルと鎮魂展 （H17）

150号（≒170cm×190cm）×３枚

●柿の木プロジェクト（H１８～）

⇒ホタルと平和を結びつけた取り組みを一過性で終わらせないため

↓

世界的な現代芸術家である宮島達男氏が主催する「柿の木プロジェクト」を誘致

長崎で被爆した“柿の木の２世”を平和のシンボルとして、アートイベントとともに世界中に植える活動

⇒原爆とアートというコンセプトが共通

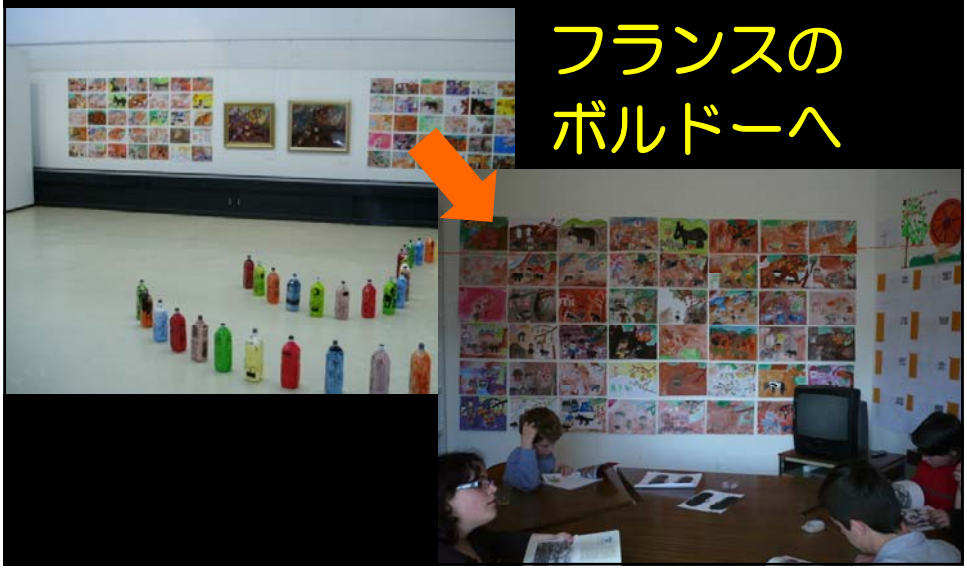
●地元小学校の総合学習や地域コミュニティとの連携による取組

ホタルの里で切った竹を使って、モニュメントづくり

地域の方も参加し、小学校と公園に植樹

●「柿の木プロジェクト展」（H19）

●展覧会のために小学生が描いた作品は、２年続けて海を渡りフランスのボルドーへ



●原爆稲の栽培（H21）

地域資源の
ネットワーク化による
3つの成果

①相互の理解と交流の促進

●丸木美術館をはじめ、天の園の会、地元小学校、地域コミュニティの相互理解と活動の交流が進む

②環境と平和をテーマとするエコミュージアムの構築

- 丸木美術館内でのホタルの里の常設展示
- 地元小学校や環境団体、地域と連携による関連事業の通年実施

③ＥＳＤ（持続可能な開発のための教育）の展開

- 総合的な学習の時間での地域学習をベースとして環境、平和、国際理解へと発展

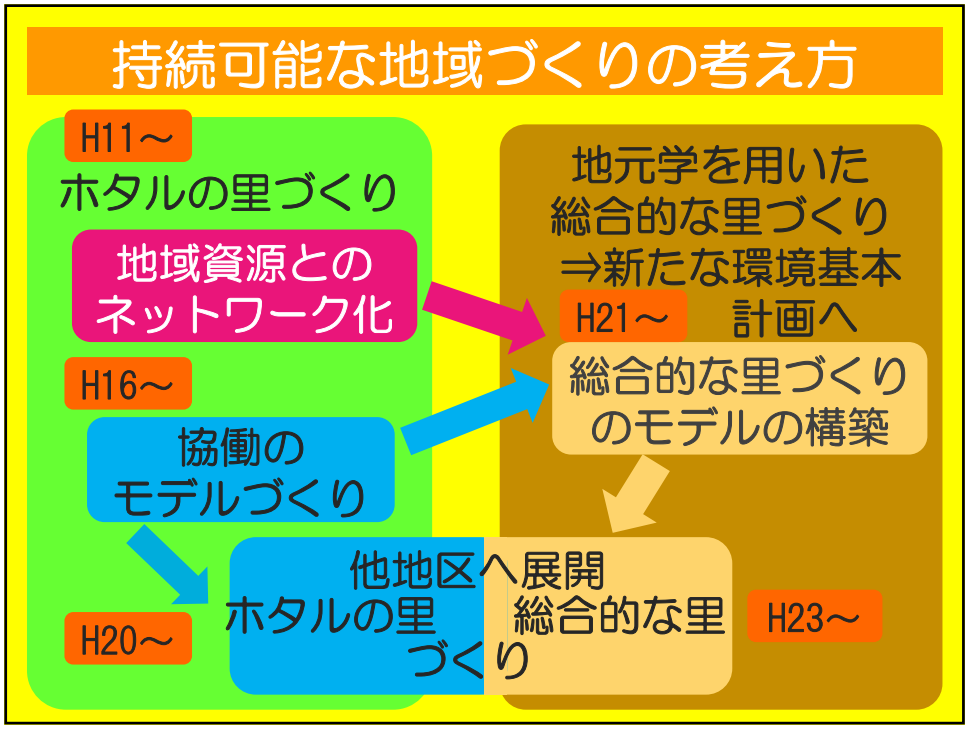
そして、
次なる１０年
ホタルの里づくりは
セカンドステージへ！

里づくりで高まった地域の当事者意識や実践活動を“足がかり”として、より総合的な地域づくりを展開。

⇒そのための手法として地元学を推進！

ホタルの里で学んだこと
⇒足元にある大切なものを見つめ直し、その活用を通じ、持続可能な地域づくりをポジティブに推進。

水俣市の吉本哲郎さんを迎え、
地元学を実践中！
“あるものさがし”
の絵地図づくり


持続可能な地域づくりの考え方
H11～
ホタルの里づくり
地域資源との
ネットワーク化
H16～
協働の
モデルづくり
H20～
ホタルの里
づくり
他地区へ展開
地元学を用いた
総合的な里づくり
⇒新たな環境基本
計画へ
H21～
総合的な里づくり
のモデルの構築
総合的な里
づくり
H23～